

日本行動分析学会ニューズレター J - A B A ニュース

2004年 秋号 No.36 (11月30日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 中野良顯

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内

FAX:03-3238-3658(日本行動分析学会事務局と明記) URL:http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/

2004年度総会を終えて	中野良顯
第2回学会賞(2004年度)受賞者の決定	清水直治
第2回学会賞論文賞を受賞して	小田史子
第2回学会賞実践賞を受賞して	大野城すばる 園 野口幸弘
編集委員会より	真邊一近
財務担当より	坂上貴之
第22回年次大会こぼれ話	望月 要
第3回学会賞(実践賞)候補者推薦のお願い	清水直治
研修会(公開講座 8/17)の報告	藤田継道
2004年度「日本在住学生委員のABA参加助成事業」について	杉山尚子
アメリカで行動分析を学ぶ可能性(2)	杉山尚子
夏休み短期留学報告	田中善大
学会情報 / 常任委員会ヘッドライン	中野良顯
学会情報 / 会員情報	事務局
編集後記	藤 健一

2004年度総会を終えて

理事長 中野 良顯

第22回年次大会は帝京大学において行われ、最終日の9月5日に2004年度の総会が開かれました。

主な報告事項は、会員数670名(9月現在)、会費納入率75%、2003年度事業報告(第21回大会開催、機関誌17巻1,2号、18巻1号発行、J-ABA ニュース、31,32,33号発行、日本在住学生会員のABA参加助成事業実施、第1回学会論文賞・実践賞選考と授与)、2003年度決算報告、2005年度年次大会開催校提案(常磐大学)であり、いずれも参加者によって承認されました。

また審議事項としては、各委員会から2004年度事業計画の提案と、そのための予算案が提案され、一部修正の上承認されました。

この総会で、2005年度の第23回年次大会が、水戸市の常磐大学において開催されることを報告するとともに、森山哲美次年度大会委員長から熱意あふれるご挨拶を頂戴いたしました。

日程については、すでにホームページでお知らせしている通り、7月29日(金)、30日(土)、31日(日)の3日間です。今年の年次大会の参加者数317名を上回る多数の方々のご参加をお

待ち申し上げております。

ホームページのこと

日本行動分析学会のホームページは、管理者転任のため長らく放置されておりましたが、浅野常任理事、藤常任理事、望月要氏によるワーキンググループの格別のお骨折りによって新規ドメインが取得され、2004 年 11 月から運用が再開されました。ウェブサイトは www.j-aba.jp です。今後、徐々に内容の更新をまいりますので、今後とも御支援のほど宜しくお願い申し上げます。

このホームページには、現在「お知らせ」「日本行動分析学会」「行動分析関連の情報(国内)」「行動分析学関連の情報(海外)」「心理学全般の情報」「その他、お役に立つかもしれない情報」などが掲載されています。

これらの情報に加えて、今後は実践家や一般市民や保護者向けに、効果の立証された行動分析の治療や教育の方法に関する最新の情報を掲示するサイトを、できれば新設したいと考えています。

ヒントになったのは、コクラン・データベースや、アメリカ心理学会第 53 部会「児童青少年臨床心理学会」のウェブサイトです。後者には「児童青少年のためのエビデンス・ベースのトリートメント」というサイトが設けられています。そこでは実践家や市民向けに子どもの精神保健分野の科学的証拠に基づいた最新の治療教育法が紹介されています。

例えば、いま話題になっている注意欠陥多動性障害 (ADHD) のところでは、5 つのエビデンス・ベースの治療オプションが紹介されています。すなわち、「十分立証された治療法」として、

向精神薬の投与、行動主義的ペアレントトレーニング、行動主義的教室介入の 3 つ、「ほぼ有効な治療法」として、ソーシャル・スキルトレーニングと般化の手立て、夏休みの治療プログラムの 2 つがリストアップされています。

その行動主義的教室介入の説明は、次の通り

です。「ADHD に対する教室介入とは、教師とのコンサルテーションによって行う介入のことです。相談することは、行動療法の戦略を学校場面でどう活用するかという問題です。教師に求められることは、教室の中にルールと構造を確立すること、子どものプラスの行動に対して賞賛と注目を与えること、マイナーな問題行動は無視するとともに、より深刻な行動にはタイム・アウトを適用すること、点数システム、またはトークン・システムを活用すること、です。有効な教室介入の一つとして、デイリー・レポート・カード(「今日の通信簿」)の活用があります。カードには、子どもの具体的な行動を書いておき、行動面と学習面において目標を達成できたらご褒美を与えるという方法です。ADHD の子どもたちは、学習面と社会面での困難を支援するために、必要に応じて特別支援教育サービスや便宜を提供するようにします。そしてこの簡潔な説明の後に、根拠となった文献一覧が付されています。

行動分析という学問の成果をこの程度の簡潔な文章によって、一般の人々にプレゼントできるようにするシステムを作ることができれば、行動分析を広く普及させるうえで非常に有効ではないかと考えられます。

ついでながら、エビデンス・ベースの実践では、専門家の報告や意見、あるいは権威者の臨床経験は、証拠のクオリティの序列においていちばん劣悪なものとして位置づけられています。序列の最高位にあるのは、ランダムに割りふられた実験群と統制群に対する実験的介入とブラシボ介入の結果を比較して得られた効果の複数の証明です。

エビデンス・ベースの実践がよって立つ哲学の成分として、ガンプリルは次の 5 つを掲げています(注 1)。権威主義的实践や方針からの脱皮、倫理的義務の称揚、透明性と正直さの推進、実践・倫理・証拠問題の統合へのシステムのアプローチの奨励、知識と知識の欠如に関する情報の還流の促進。

そしてエビデンス・ベースの実践の基本的手続きは、患者の問題から明確な臨床上の問いをつくる、文献を検索し関連ある臨床論文を見つけ出す、文献を妥当性と実用性の面から批判的に評価する、得られた有効な知見を臨床実践に適用する、の4ステップです。

このような哲学を受け入れ、科学的根拠に基づく実践を実現したいと希望している人々に対して、最新の関連情報を簡潔に提供することは、私たちに課された大切な課題であるように思われます。

ドン・ベアの白鳥の歌

応用行動分析の父、ドン・ベアが突然この世を去ってから、早くも2年以上の月日が経ちました。白鳥は死に瀕したとき最も美しく歌うとの神話から、芸術家の最後の作品を「白鳥の歌」と呼んでいます。ドン・ベアにとっての「白鳥の歌」とも言うべき論文が発表されました。「法律家への手紙」という1章で、『教育における行動分析に焦点を当てる』という最新刊の書物の巻頭を飾っています(注2)。

オハイオ州立大学教授ビル・ヒューワードは、この論文が出版されるに至ったいきさつをおよそ次のように説明しています。

「法律家への手紙」は、ドンによって用意されたオリジナルな草稿であり、2000年秋にまとめられたものです。私はオハイオ州立大学大学院で長年「特殊教育の現代の諸問題」というゼミを開いていますが、それは他大学の優秀な学者を客員教授(ゲスト・ファカルティ)としてお迎えして、教室の中央にスピーカーフォン(電話回線)を設置してリアルタイムでアクセスして、90分の電話討議(テレカンファレンス)という形で進められるものです(注3)。使う教材は、その客員教授がすでに発表した論文の中の数編であり、事前にゼミの学生に指定されています。登録した学生たちは事前にそれらを精読し、電話討議のときの質問事項を決めておき、電話に出ている客員教授とその質問を使って論

文についてのディスカッションを行います。ドンはこの30年の間に3回、このゼミの優れた客員教授を喜んで引き受けて学生たちを指導してくれました(注4)。

この「法律家への手紙」は、ドンが2000年までに裁判所に提出した宣誓供述書のコレクションです。それはわが子に応用行動分析のサービスを提供してほしいと学校や医療補助機関に訴えた自閉症の子どもたちの親側の専門家証人として法廷に立って供述したものであり、応用行動分析が自閉症と広汎性発達障害に対する治療教育としてなぜ必要であり、どのような可能性が秘められているかを平明な英語で論述したものです。この文章には、応用行動分析についての重要な洞察が数多く含まれていたため、2002年9月に開催する第3回オハイオ州立大学教育会議のオープニング・スピーチとして、発表してほしいとドンに依頼しました。2002年2月25日付のドンの返事にはこう書かれていました。

オハイオ州立大学教育会議での講演は、2000年までの宣誓供述書のコレクションをさらに膨らませたものにしたいと考えています。それは本の1章ほどの長さになるでしょう。それでもよろしいでしょうか? そのやや長い1章とは別に、1時間ほどのスピーチも用意するつもりです。2つはトポグラフィにおいては同一ではありませんが、機能においては同一であると思います。会議におけるスピーチと本の1章の両方を準備しても構いませんか?

ドンが2000年の草稿に何を付け加えようとしていたかは、今となっては知る由もありません。その後の法廷での経験がドンにもたらした新しい洞察を私たちに語る前に、ドンがこの世を去ってしまったからです。われわれは2000年の「法律家への手紙」を、加筆修正を最小限に抑えて、ほとんど逐語記録の形でここに収録します。これはドンの活字としての最後の業績となるでしょう。

ビルがこのように紹介する「法律家への手紙」には、4つの訴訟における被告側の弁護士の質

問に対する回答が認められています。「応用行動分析とは何か?」「応用行動分析の大きな部分を占める不連続試行訓練(DTT)はどんな技法であり、それは自閉症児の治療教育にとってなぜ必要か?」「DTT 批判として引き合いに出される刺激性制御、偶発教授、刺激等価性などの手続きも、構成成分の大部分は DTT そのものであるが、なぜそのように言うことができるのか?」などの質問に対して、ドンは実に無駄なく平易に答えを示しています。この本は 2005 年刊行となっていますが、すでに店頭に並んでいることと思われま。行動分析や特別支援教育などのゼミのテキストとして広く活用されることを願っています。

注 1 Gambrell, E. (2003). From the editor: Evidence-based practice: Sea change or the emperor's new clothes? *Journal of Social Work Education, January 1, 2003*.

注 2 Baer, D. M. (2005). Letter to a lawyer.

In W. L. Heward et al. (Eds), *Focus on behavior analysis in education: Achievements, challenges, and opportunities* (pp.3-30). Upper Saddle River, NJ: Pearson Prentice Hall.

注 3 著者が参加したテレカンファレンスについては次の文献を参照。中野良顯(2001) 海外の論調・学会の動向(12) 教室で報酬を使うことは有害か? *指導と評価* 2001 年 12 月号、39 頁。

注 4 ドン・ベアのテレカンファレンスのハイライトについては次の文献を参照。Heward, W. L., & Wood, C. L. (2003) Thursday afternoon with Don: selections from three teleconference seminars on applied behavior analysis. In K. S. Budd & T. Stokes(Eds.), *A small matter of proof: The legacy of Donald M. Baer* (pp.293-310). Reno, NV: Context Press.

第2回学会賞(2004年度)受賞者の決定

学会賞担当常任理事 清水 直治

日本行動分析学会の第2回(2004年度)学会賞(論文賞)および学会賞(実践賞)が、去る9月3日から5日まで、帝京大学で開催された日本行動分析学会第22回年次大会において発表された。

日本行動分析学会の学会賞(論文賞)は「わが国における行動分析学に関連する研究の促進及び発展を目的として、選考を行おうとする前年度に発行された『行動分析学研究』に掲載されたすべての論文を対象に、最も優れた論文1編に対して与えられる」と規定されており、第2回(2004年度)学会賞(論文賞)は、『行動分析学研究』第18巻1号に掲載された小田史子

氏による「オペラント条件づけによる子イヌのトイレトレーニング: 家庭における室内トイレトレーニングの介入事例」に決定した。論文賞の選考は、選考規程により行動分析学研究の編集委員から3名、理事から3名、学生会員から3名、それ以外の一般会員から8名の合計17名の選考委員によって行なわれ、有効投票総数14票のうち得票数4票で小田論文が僅差で第1位に選ばれた。選考理由をまとめると、「動物のしつけに行動分析学の原理を適用した研究論文としては、わが国で最初のものであり、今後のモデルになる論文である。本論文は子イヌのトイレトレーニングについて、実験計画を含

み正規の科学的方法によって記述されており、イヌの飼い主にとっても、多くの有益な知見を提供している」ということであった。

また、学会賞(実践賞)は、「現代社会における課題を解決するために、行動分析学を応用して顕著な実績をあげ、会員の推薦を受けた実践のうち1個人または1組織に与えられる」とされており、第2回(2004年度)学会賞(実践賞)は、規程により選出された理事から6名、学生会員から3名、それ以外の一般会員から6名の合計15名の選考委員による投票の結果、有効投票総数15票のうち第1位は、得票数7票で、大野城すばる園(理事長 野口幸弘)の「自閉性障害児・者を対象とした療育活動や地域社会における支援への応用行動分析学の適用」に対する実践に与えられた。選考理由をまとめると、「青

年期以降の自閉性障害児者を主な対象とした療育活動と地域社会における支援とその評価の方法に、応用行動分析の知見が確かに取り入れられ実践されている。ことに対象者の個別の行動障害の低減に留まらず、望ましい行動の形成や地域社会における質の高い生活を支えることなど、サービスを受ける側の主体性に配慮した実践は近年の福祉におけるアプローチに合致している。さらに実践の成果を広く学会等で報告しており、その面での貢献も大きい」ということであった。

会期2日目の学会総会に先立ち、学会賞(論文賞)並びに学会賞(実践賞)の授賞式が開催され、各賞ごとに賞状並びに賞金5万円が贈られた。その後、各受賞者による小講演が行われた。

第2回学会賞論文賞を受賞して

トイレトレーニング、あのとき、あれから、そして今

小田 史子

6年前の今ごろ、私は自分の犬のトイレトレーニングに大変苦労していました。部屋中の排泄物を片付けて回る辛い日々は1年以上続き、その後、私は行動分析学と出会いました。そしてついに、トイレでの排泄後に強化子をあげるようにしてから約6ヶ月後、トレーニングを完了することができたのです。「ほかの人にも教えてあげたい。私がした苦労をしなくてもすむように」。その頃抱いたその思いが、私の研究の原点です。

データを録っていたあの頃、私には忘れられない一瞬があります。それは、トイレを学習したすべての犬に、排泄回数の増加や人間を見ながら排尿するといった行動が見られることに気づいた瞬間です。トイレトレーニングは、片時も犬から目が離せない大変な時期ですが、そん

な変化をチェックポイントにできたなら、飼い主さんたちを確実にゴールまで導いてあげられると思ったのです。

それ以来私は、トイレの相談に乗るときに、必ずそれを言い添えるようになりました。そして実際に、ご自身の犬のそんな変化に気がつくようになると、飼い主さんにも変化が見られます。「ウチの子は覚えるの遅いですよ?」とほかの犬と比べたり、イライラすることがなくなるのです。「大切なのは先を急ぐことじゃない。小さな一歩を心から喜んであげる気持ちなんだ」。飼い主さんたちから、私はそう教えられた気がします。

そして今、私には願いがあります。トイレトレーニングが、犬が学習していく姿を暖かく見守り続けた楽しい経験として、いつまでもその

人の中に生き続けて欲しいのです。「人一倍時間がかかってもちっともかまわないよ。キミにだって、学習する力がある。変わる力がある。だからキミのペースで、キミらしく学習していけばいいんだよ」。どんなときにも私が、こんな気持ちで自分の犬に向かい合えるのは、あのトイレトレーニングの日々があったからです。今度はそんな気持ちを誰かに分けてあげたい。そしてそれが叶ったとき、その方から力をもらって

私の研究は本当に輝けるような気がします。そしてその輝きが、その人と犬との暮らしを明るく照らし続けるものになればこんなにうれしいことはありません。

ご指導くださった日本大学 河嶋 孝教授、査読してくださった先生方、ご協力くださった飼い主さんと犬たちに心よりお礼を申し上げます。論文賞の名に恥じぬよう、今後も精進して参ります。

第2回学会賞実践賞を受賞して

大野城すばる園 野口 幸弘 (西南学院大学)

このたびは、私たちが目指してやってきた実践（激しい行動障害を抱える人たちの行動の改善と充実した豊かな生活を創る）に対して嬉しい評価をしていただき本当に感謝しています。

これまでの生活史の中で激しい行動障害を身につけてきた人に対する援助は、24時間365日の生活の見直しと援助の一貫性を求められます。従って日本の関係者の大半は、こうした人たちの支援の場を入所の施設と考えています。そんな中、社会福祉法人ではない社団法人大野城すばる園は、公的な援助は全くない状態で、親との契約料のみで援助活動をしてきました。本来は24時間型でなく日中の通所機能で仕事をしているグループです。

このような機関が、厳しい行動面の問題を抱えている障害者や家族の支援をしていく上で絶対に必要だと大切にやってきたことは、常に利用者や家族の立場になって、丁寧な情報の収集とアセスメントを行い、そのデータの分析から引き出せる仮説に基づいた総合的行動支援計画を策定し、それを実践しその結果を評価しながら

ら繰り返し支援を継続するということでした。もちろんこうした実践を続けていくときに応用行動分析を中心とした様々な理論と援助技術を学び実践してきたスタッフが存在し、それらを支え続ける組織を創り出したことが大きな成果でした。

こうした実践から、従来の激しい行動障害が軽減改善してからグループホーム生活や地域に移行する考え方よりもそうした行動を抱えながらもできるだけ大幅な生活環境の変化をしないで家族と協働しながら徐々に本来の地域生活を実現させていく援助の方が支援者の資質も高められるし、予防的な視点も培われることがわかってきました。このたびすばる園のこうした取り組みが評価を受けたことは、私だけでなく、これまで行動障害をもつ人たちの行動障害の改善とその人らしさを発揮しながらの地域生活支援の実現に真摯に取り組んできたスタッフに望外の喜びを与えてくれました。そのことをこころより嬉しく思います。関係者の方々本当にありがとうございました。

編集委員会より

行動分析学研究編集委員長 眞邊 一近

この度の水害および地震にみまわれた会員の皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈りします。

前回の号でお知らせしましたが、20巻第1号(2005年度号)から現在の行動分析学研究の執筆・投稿規程を、アメリカ心理学会(APA)のAPAマニュアルにより準拠した書式に変更する予定で、現在検討を進めています。次回のニューズレターに主たる変更内容を掲載できればと考えています。

今夏行われた行動分析学会年次大会では、素晴らしい内容の発表を多数お見かけしました。ぜひ、1編でも多く行動分析学研究へ投稿して

頂ければ幸いです。編集委員一同皆様のご投稿をお待ちしています。

(投稿を予定されている会員の皆様へのお願い)

論文投稿規程には、電子ファイル(TextファイルあるいはWordファイル)の提出を要件に加えていませんが、迅速な査読を行うため、ご投稿いただく場合は、印刷された論文にFDあるいはCDに記録された電子ファイルを添えてください。また、可能ならe-mailでも添付ファイルとしてお送りください。もし難しい場合は、従来通り印刷した原稿をお送りください。編集部で電子化します。

財務担当より

学会のお仕事の今後と財政問題

財務担当常任理事 坂上 貴之

現在日本行動分析学会は、その活動拠点として事務局を上智大学にしている。常任理事の役目は、ほぼ2ヶ月に1度、日曜日に開催される常任理事会に出席し、分担された役割の進捗の報告と、学会の運営に関わる決定を行っていくこと、そして理事会や総会を主催していくことである。事務局は、会員管理(入退会、会費徴収)会計管理、会員や外部諸機関との連絡事務、学会誌の発送、バックナンバーの管理・販売、そして常任理事会、理事会、総会の議題準備が主要な仕事である。現在、中野理事長のもと、山本崇博さん、鈴木義弘さんを中心に、合計5名の上智大学大学院生の諸君が切り回して

くれている。連絡業務は日常的に来る仕事なので、うまく仕事と学業、研究のバランスをとっていかねばならず、大変なご苦勞をお願いしている。

常任理事は事務局とは別に分担された特別な役割がある。例えば編集を担当する理事は、学会誌編集に関わるすべての業務、審査の振り分け、掲載の判断、原稿の送受、印刷所との対応、編集委員との対応などを独立に行っているし、ニューズレターを担当する理事はニューズレターの原稿集め、印刷、発送というように。そうした意味で常任理事も結構大変である。

さてこのような業務、特に現在事務局が行っ

ているような会員管理、会計管理、連絡事務を最近の学会では外部委託し始めている。それは、大学院生などの個人的な努力やボランティアにできる限り頼らないで、しかも大学院を擁するような大規模な大学などの職務についていない会員でも、学会の運営を可能にするためのように見える。私の知るこうした心理学関係の学会には、社会心理学会、基礎心理学会などがある。このような学会では、ウェブページを活用しながらさまざまな新しい方法を試みている。例えば、ウェブページからの会員申し込み、会員情報の変更、メールによる連絡、理事会などの会議通知、そして年次大会の処理である。

本学会でも、こうした外部委託とその基礎となるウェブページの活用について調査を開始した。現在、ウェブページについては浅野常任理事の下で藤常任理事のほか、学会のページを維持してくださっている望月要氏も加わって、

活動が開始されたところである。幸いサーバの確保などの資金については、現在のところ問題は無い。しかし外部委託となると、人件費と管理費で100万程度の資金が必要となり、現在の学会財政ではこれを捻出することが大変難しいといわざるを得ない。

常任理事会では、この問題を会費納入率の上昇と学会開催の公開講座や研修会による収入によって、解決できないかと考えている。しかし安定した収入増を考え、外部委託を含めた学会運営を実行していくためには、おそらく近い将来、学会費の値上げを検討せざるを得ないと私は見ている。この問題は将来の学会像を決定する、とても重要な問題である。学会員全員の関心と多くの方からのご意見によって、よりよい方向が生み出されていくのではないかと考えている。

第22回年次大会こぼれ話

第22回大会実行委員 望月 要

日本行動分析学会第22回年次大会実行委員会は、会員の皆様方の温かい御支援のもと、盛会のうちに重責を果たすことができました。改めて、お礼申し上げます。今回は、大会準備の裏話、こぼれ話をご紹介します。どの年次大会でも同じようなご苦労があったことと思います。私も実行委員会の不手際の言い訳のように聞こえるかも知れませんが、喉もと過ぎれば熱さを忘れ、どんな苦労も過ぎてしまえば笑い話ということで、ここは、ひとつお《心》を広くお持ち戴き、ご一緒に笑い興じていただければと存じます。

懇親会を予約していた業者が大学から撤退!

懇親会の食事と昼食のお弁当は、大学の食堂を担当している業者さんをお願いすることに決

めて、見積りも取り、予約も済ませてありました。以前、心理学科のパーティーで使って、献立も味も確認済のお店です。それが、大会の17日前になって、突然、大学から撤退することになったというのです。なんでも、競争入札に負けて、秋学期から大学の食堂営業を他の業者に譲らなければならないことになり、夏休み中は撤収作業をしなくてはならない、ということでした。

まさに、寝耳に水、青天の霹靂。インターネットでケータリング業者を探して、片っ端から電話して見積りを出して貰いましたが、都心から遠い八王子という場所が災いして、運送費ばかり高くなってしまいます。何より、一度も食べたことがない店の料理を、懇親会で提供する

というのは不安で仕方ありません。レストランなら試食に出かけることもできますが、ケータリングの《お試し》のために、これからパーティーをする時間はありません....

大学の食堂を担当している、もう1軒のお店にお願いする、というアイデアも出ました。ところが「この店の料理は、かなり、ひどい」という意見と、「いや、ドタキャンされた店より美味しかった」という意見、心理学科古参の実行委員の意見はまっぴたつ。前々から、懇親会は素晴らしいものにしたい、といていた実行委員長は、ABAに参加するべく地球の裏側に行っていて、メールも電話も届きません。予算は限られているし、時間も迫ってきます。一時は、どうなることかと思いました。

結局、食堂担当のもう1軒のお店にお願いすることになりました。その決断が適切だったかどうか、ご判断は、当日、懇親会にご参加下さいました皆様に、お委ねしたいと思います。台風接近、天気予報は「雨」

改めて思い返せば、ここ数年、雨に見舞われた年次大会はなかったような気がします。実行委員一同、雨への対策をすっかり忘れていても、仕方のないことでしょう。ところが、天気予報が告げる降水確率は、高まりこそすれ、下る兆しはありません。実行委員長は「僕の《念力》で、台風の進路を変えてやる!」とか言っております。勿論、それはそれで努力を続けて戴くことに致しまして、《念力》の持ち合わがない私共は、他の対処法を考えなくてはなりません。

「屋外の順路の掲示は、どうしましょう?」「ビニールを被せましょうか?」「でも、内側が蒸れると水滴が溜って、結局、読みにくくなっちゃいませんか?」「じゃあ、全部ラミネート加工しちゃいましょう!」心理学科にラミネートの機械と、フィルムがふんだんにあったのを幸い、じゃんじゃんラミネート加工した次第です。

「傘はどうするんでしょう?」「カーペット敷きの教室に、濡れた傘を持ち込んだりしたら、大学の事務から怒られませんか?」「それより、

濡れた傘をずっと持って歩く参加者も大変じゃないでしょうか?」「傘立てを用意したら?」「300人近い人が傘立てを使ったら、取り違えたりしませんか?」「傘袋は使えませんか?」というような訳で、急遽、傘袋探しに取り掛かりました。とは言っても、傘袋なんて、どこで売っているのかも知りません。仕方なく《東急ハンズ》に電話で聞いてみたら、扱ってはいるが、100枚程度しか在庫がない、とのこと。都内の主要な《東急ハンズ》の支店に電話をかけたくなって、全部の店の在庫を問い合わせましたが、それを全部使っても、2日分に足りそうもありません....と、ここで、大学の事務にお伺いを立てたところ、大学に用意してある傘袋を提供して下さいとのこと。お蔭で、傘袋探索《東急ハンズ》支店巡りの旅には、行かずに済みました。傘袋に限らず、大学の事務には、大変にお世話になりました。渡り廊下の工事の日程を変更して下さったり、バス臨時便運転の交渉をして下さったり、職員の方が学会の為に休日出勤をして待機して下さったり、大会本部の部屋にコピー機を貸して下さい....文字通り、第22回大会を蔭で支えて下さいました。あっ、停電!

さて、緊張の面持ちで迎えた大会初日の朝。早く到着された方のために、休憩室の準備を始めるべく、湯沸しポット3台の電源を同時にONしたら、全室停電....あと数十分後に口頭セッションが始まろうとしている教室が、廊下をはさんで、同じ階にあります。そこも一緒に停電して、コンピュータが使えなくなっていたら一大事です!うろたえる休憩室係を後目に、実行委員は口頭セッションの会場に飛んで行きます。

幸いなことに、口頭セッションの会場は別回路だったようで、こちらは何の問題もなく準備が進んでおりました。大学の施設の方に来て戴いて、休憩室の停電も、暫くして復旧し、事なきを得ました。後で聞いた話によると、昔の教室は、掃除用の電気掃除機が使える程度を目

安に電源容量を決めていたとか... 確かに、普段、教室で湯沸しポットを、それも3台も同時に使ったりはしませんから、予測できて然るべき事故だったかも知れません。

さて、この他にも、今、思い出しても胃が縮

むようなことが、幾つかあましたが、ひとまず思い出話しはこのぐらいにして、来年度、常磐大会の御成功を、お祈りしたいと思います。森山さん、よろしくお願い致します。

第3回学会賞(実践賞)候補者推薦のお願い

担当常任理事 清水 直治

日本行動分析学会学会賞(実践賞)の選考規定に則り、第3回実践賞の候補者の推薦をお願いいたします。この学会賞(実践賞)の選考対象となるのは、「現代社会における課題を解決するために行動分析学を応用として顕著な実績をあげた個人または組織であって、日本行動分析学会の会員であることを問わない。」と規定されています。候補者になれるのは会員・非会員を問いません。会員の皆様からの推薦によって候補者を決定いたします。日本行動分析学会会員であれば、どなたでも候補者を推薦する権利があります。

推薦要領

推薦の締め切りは、2005年2月28日(消印

有効)です。素晴らしい実践を行っている個人や組織をこの機会に是非ご推薦ください。

推薦締め切り：2005年2月28日(消印有効)

推薦の際に必要な書類：

- ・ 末尾(21ページ)の推薦書。
- ・ 2000字以内の推薦文。
- ・ 推薦文に関連する実績リスト(論文、記事等)、推薦文に関連するその他資料。

推薦書類の送付先：

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学心理学科学習心理学研究室内

日本行動分析学会事務局

研修会(公開講座 8/17)の報告

行動分析学会主催夏期研修会「『特別支援教育』を支援する：その具体的な方法」の報告

担当常任理事 藤田 継道

学会員が少なかったこともあって、常任理事会に出席する常任理事の交通費は、前小野理事長時代に地方の常任理事に一部支給されるようになるまでは一切支給されてこなかった。地方の常任理事の方々にとってその負担たるや大変な額になる。今執行部は常任理事会に出席する

地方の常任理事の交通費を支弁する方針を打ち出したが、その予算確保が急務であった。また、事務局員の仕事量(労働時間)の増大に対する労働対価を増額する必要があった。この二つの問題を解決するためには、学会の収入を増やさなければならなかった。学会費を値上げしない

でこの問題を解決する方法が検討された。その解決策が、会員の増員、学会参加者の増員、出版による収益の確保、研修会による収益の確保等であった。そこで、行動分析学を広めると共に、学会の収入を増やす企画の1つとして会員以外の一般の方々が多数参加してくれる研修会の開催が検討された。その結果、今、学校現場で最もホットであり、かつ具体的方法が求められている「特別支援教育」に資する具体的方法を提供する企画が藤田から提案され、常任理事会で了承された。それが、表題に見られる今回の企画であった。研修会の概要は以下の通りであった。

平成16年8月17日(火)午前9時半～午後5時のスケジュールでアウィーナ大阪を会場として開催された。本企画には大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、近畿肢体不自由養護学校長会、近畿知的障害養護学校長会の講演をいただくことができた。

午前中は、中野良顯理事長から「通常の学級におけるLD・ADHD・高機能自閉症の子どもへの特別支援教育」と、オハイオ州立大学教授ウィリアム・ヒューワード教授から「通常の教室に在席するLD・ADHD・高機能自閉症児の学業成績を伸ばす“研究で実証された5つの指導法”」の講義が行われた。

午後には、藤田から「ADHD、高機能自閉症児の特別支援教育を支える具体的方法：離席・飛び出し・ちょっかい・私語・興奮・パニック・爆発・暴力への対応、課題(勉強)従事行動の増強法」の講義が行われた後、滋賀県甲西町民生部福祉課発達支援室藤井茂樹参事から「LD児の具体的指導法」のタイトルで、教育と福祉の現場と行政が一体となり、町をあげて特別支援教育の対象となっている人を生涯にわたって支援するシステムの紹介と具体的指導法が紹介された。最後に、兵庫県川西市立川西養護学校橋本正巳教諭から「通常の学級に在席するLD・ADHD・高機能自閉症児の指導に困っている担任への支援：豊富な具体的実践例の

紹介」の演題で、校内支援(教育相談)体制の構築および、ご自身がコーディネーターとして通常の学校への「訪問支援」によって対処してきた多数の事例が紹介された。

参加者は全日程参加者が310名、半日参加が2名であった。参加者の内訳は小学校教諭162名(16.5%)、養護学校教諭89名(28.5%)、中学校教諭17名(5.4%)、私的教育機関職員8名(2.6%)、学生8名(2.6%)、教育センター指導主事6名(1.9%)、高校教諭2名(0.6%)、福祉施設職員2名(〃)、市議会議員2名(〃)、短大教員1名(0.3%)、福祉課職員1名(〃)、クリニックスタッフ1名(〃)、不明10名(3.2%)であった。行動分析学会員は18名(5.8%)であった。ただし6名が中野理事長関係者、6名が藤田ゼミ関係者であった。一般会員の参加が6名と少なかったのは、案内が遅れたことが最大の原因であると思われる。次回はもっと早めに案内をする必要があるだろう。

さて、参加者の多さから本研修会の二つの高さが伺われ、来年も本研修会と同じ内容の研修会を開催しても多くの方々が参加することが予想されたので、急遽参加者の本研修会に対する感想を書いてもらった。その結果、以下の2点に集約できる情報を得ることができた。

大変勉強になったが、情報量が多すぎるので、研修を2日間にして、1つ1つの話しをじっくり聞きたかった。もし、1日研修にするなら、講義の数を半分にして、もっとじっくり話しを聞きたかった。もっともっと具体的な事例の話をたくさん聞きたかった。

来年度、盆明けの8月17日、18日、19日頃、学校関係の研修会がないときに、東京で是非「『特別支援教育』を支援する：その具体的方法」の研修会を企画・開催していただきたい。音響効果がよく、輝度の大きいプロジェクターを備えた広くて快適だが、借用料が安い会場で、ゆったりしたスケジュールのもと、じっくり話を聞ける2日間の研修会を開催してはどうだろう。きっと、事務局は潤うに違いない。ただし、

今から準備委員会を結成し、文部科学省や東京都教育委員会主催等の研修計画の日程調査、後援の取り付け、会場の確保し、講師陣の交渉等の準備を始める必要があるであろう。

「特別支援教育」がらみの研修会は来年度が二週間のピークのように思われる。その先の企画を考えておくべき時期に来ているように思わ

れる。不登校対策に対する文科省の反応は従来よりトーンダウンし、不登校対策に金をつぎ込むことに対してネガティブになってきているように見える。人がたくさん来てくれるテーマは何か？虐待問題か、非行を含む問題行動か？会員の皆様のアイデアを期待したい。

2004年度「日本在住学生会員のABA参加助成事業」について 応募要項

担当常任理事 杉山 尚子

日本行動分析学会は、1983年の創立以来、行動分析学の研究、教育、実践活動の支援を通じて行動分析学の発展に寄与してきた。その活動を国内のみならず国際的にもいっそう拡大することをめざし、創立20周年を機に、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動をさらに推進するための標記事業を開始することとなった。助成金は米国への往復渡航費に充当する額である。奮っての応募を期待する。

< 応募資格 >

1. ABAの規定する発表申込期限までに発表を申込んだ者。
2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABA Expo、同窓会(reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。
3. 2004年4月1日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABA参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABAが募集する学生発表

者の大会参加費免除への同時応募は認める。

4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けていない者。

< 提出書類 >

1. 規定の応募用紙(学会事務局に請求のこと)に必要な事項を書き込んだもの
2. ABAに提出した発表申込書(を印刷したもの)
3. ABAが12月第1週に発行する発表受理書(acceptance letter)。ただし、申請時までに入手できなかった場合は、発表申込時にABAが返送したメールによる発表受理通知を印刷したもの。

< 助成額 >

応募者の中から、抽選により2名に対し、1名につき75,000円を渡航費として支給する。ただし、受給後、ABAに参加を取りやめた者は返金しなければならない。この場合は、再抽選を行なう。

< 応募締切 >

2004年12月10日消印有効。12月19日開催予

定の常任理事会において公開抽選を行い、当選者に通知する。
< 応募書類請求ならびに提出先 >
日本行動分析学会事務局

〒 102-8554
東京都千代田区紀尾井町 7 1
上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内
E-mail: yoshia-n@sophia.ac.jp

アメリカで行動分析を学ぶ可能性(2)

夏学期 WMT への 1 か月留学

杉山 尚子 (山脇学園短期大学)

杉山 (2004) にあるように、毎年 5 月末に開催される ABA (国際行動分析学会) 年次大会に参加する日本人学生は 2001 年以降 20 名を超え、今年は 25 人を数えるようになった。学生はいずれは卒業するわけだから、毎年コンスタントに 20 名を超える参加者があるということは、年々新たな参加者がいるということですから素晴らしいことである。ABA で発表するという事は、自分の研究が国際的な基準で評価を受けるだけでなく、国際的な研究者や志を同じくする海外の大学院生と知己を得ることを可能にする。私自身、現在交友のある海外の行動分析家のほとんどは、ABA に参加することで親しく交際するようになった方々である。

しかし、ABA はいまや 4000 名に近い参加者があり、文献でしか知り得ない著名な研究者や同年輩の大学院生と言葉を交わす機会があるとはいえ、しょせん会期は 5 日であり、ゆっくりと討論する時間はなかなかとれない。特に参加者が激増している昨今は、一緒に食事をしたり、お酒を飲んだりする時間をとるのが以前に比べて難しくなっているのが現状だ。

それでは海外の研究者の考えをもっとじっくり伺ったり、海外の大学院生ともっと交流を持つにはどうしたらよいだらうか。その方法の一つとして、すでに杉山 (1997) では 1 年間の短期留学について紹介したので、ここではさらに短い夏休みを利用した 1 か月間のウェスタン・

ミシガン大学 (WMU) 短期留学について紹介したい。

このプランの創始は 1993 年のマロット教授と私とのおしゃべりに端を発している。1993 年の 5 月、シカゴで開催された ABA に参加した後、私はウェスタン・ミシガン大学を訪れる機会を得た。すでに親しく交際していたマロット教授のお宅に居候をしながら、ある日の朝食後、行動分析の普及について話をしている中で、日本から ABA に参加する人が少ない (当時は学生・一般合わせてほとんど 5 名以下) という話題になった。私はとっさに「時期が悪い。5 月末はアメリカ人にとっては夏休みの入りばなで都合が良いでしょうが、われわれにとっては学期の最中で授業は簡単に休めない」と答えた。それなら、いつが都合がよいのだ」とさらに畳み掛けてくる。そこで、「夏休みでしょうね」と答える。よせばいいのに、「夏休み中に開催される国際心理学会議には日本から大挙して参加するようだから」と言ってしまった。ディックはさらに、「夏休みはいつだ」と聞いてくるので、「7 月末から 8 月です」と答える。すると、「では 8 月に WMU で日米のカンファレンスを開こう。日本から何人くらい参加できるか」と言い出したので仰天する。これは、困った。

ディックは真顔である。この頃が私自身、行動分析の普及を真剣に考えはじめた時期であったのだと思う。しかし、その頃、はっきりと気

づいていたことは、自分より若い世代を対象にしないと満足すべき費用対効果は得られないということであった。カンファレンスとなれば、対象の多くはおそらく自分より上の世代であろう。もし二本側のとりまとめでも依頼されようものなら、そのために労力を使うのは嫌だなというのが正直な気持ちであった。しかし、真剣なディックに水をさすこともためらわれた。その時、突如ひらめいたのである。私の口は勝手に動いた。「ディック、もし行動分析を普及させようというなら、カンファレンスよりもっと良い方法がありますよ。それは、学生を本場アメリカで勉強させることです。具体的な方法が何一つあるわけではなかったが、私はいつの間にかそう言っていた。すると、ディックの目が一瞬大きくなった。「そうか……。実は、自分は夏休み期間中も夏学期のセミナーをもっている。それはブートキャンプと呼んでいるもので、9月から修士課程に入学する新入生に行動分析の基礎を教える授業である。前半は6月から始めるが、後半は7月末から4週間開講するので、これに日本からの留学生を受け入れよう」と言うではないか。棚からぼた餅とはこのことであろう。思いつきで答えたことが、実に魅力的なアイデアになって返ってきたのである。

私はもちろん、ディックもこの自分のアイデアがよほど気に入ったようで、カンファレンスのことなどすっかり忘れ、それからすぐにWMUの関係部署に連絡を取りはじめた。私はそばにいてもすることがないので、マリア・マロットと一緒に散歩に出かけてしまった。その結果、翌日はトロントへの移動日であったが、カラマズー(WMUの所在地)を発つ前に、WMUの国際センターに私を連れて行き、来年の実施に向けて、学費や寮の使用許可など、具体的な方法がほとんど決まってしまうところまで話は進んだのである。(おかげで飛行機に乗り遅れそうになった)。

私はこの計画をたいそう面白いと思ったが、さて現実に戻ってみると、本当に日本から参加

する学生がいるだろうかと不安になってきた。しかし、日本に戻り、親しくしている後輩たちにこの計画を話してみると、非常に興味を持って聞いてくれたのが救いであった。そして、1994年夏、植田郁子(当時明星大学大学院修士1年)、清水由紀(現在、野川由紀。帝京大学専任講師、当時は駒澤大学大学院修士2年)、武藤崇(立命館大学助教授:当時は筑波大学大学院博士1年)、山岸直基(駒澤大学非常勤講師、当時は駒澤大学大学院修士2年)の勇気ある4名が、カラマズーに向けて飛び立ったのである。それから10年、私の怠慢で履修者を送れない年もあったが、学部生、大学院生、若手教員総計18名がこのプロジェクトに参加した。その中には、岡山大学学部在学中に参加し、卒業後、再びカラマズーに戻り、WMUの大学院に進学し、OBMを学んだ白石真之さん(現在日立電線勤務)もいる。

WMUブートキャンプには、今年も、セルビア・モンテネグロ出身のSIMIC Miraさん(岡山大学大学院)、中国出身の冉欣星さん(岡山大学大学院)、田中善大さん(関西学院大学大学院)、空間美智子さん(兵庫教育大学大学院)の4名が参加した。このうち、田中さんは、後輩諸氏のために次に掲げる参加体験記を快く執筆して下さい。記して感謝する。またこのプロジェクトは、マロット先生の特別なご好意やWMU関係者の格別のご配慮だけではなく、開始に当たっては1992年にWMUから学位を取得された島宗理さん(鳴門教育大学)そして近年は竹島浩司さん(WMU大学院)のご協力なくしては、実現できなかったであろう。日本の若い人々のために力を惜しまぬ多くの方々に厚く御礼申し上げる次第である。(なお、来年度参加希望者ならびに詳細な情報をご入用の方はQw105617@nifty.comまでお問い合わせ下さい)。

引用文献

杉山尚子(1997) 海外で行動分析学を学ぶ可能性(1): 学部在学中の1年間の留学 J-ABA ニューズ、第8号、8・9。

夏休み短期留学報告 ウエスタンミシガン体験記(2004) 田中 善大 (関西学院大学文学研究科)

今年の夏(7/21~8/10)に、アメリカ合衆国ミシガン州のウエスタンミシガン大学で Richard W. Malott 先生による行動分析学の短期集中コース(P671)を受講しました。このコースは、Boot Camp と呼ばれていました。Boot Camp とは、軍隊に入る若者が基礎をみっちり叩き込まれる軍事教練所のことなのですが、この名前が示しているようにこのコースの目的は、Malott 先生のゼミに入ってきた大学院の1年生に行動分析の基礎を短期間で集中的に教え込むというものでした。コースは約2ヶ月行われ、前半1ヶ月は行動分析の基礎編、後半1ヶ月は行動分析学の応用編といった位置づけで行われていました。

私は、後半の行動分析学の応用編に参加しました。私のほかにも日本からの留学生として、兵庫教育大学から日本人1人、岡山大学から中国人1人とセルビア・モンテネグロ人1人の計3人が参加していました。

私が受講した行動分析学の応用編では、最初の1週間で Malott 先生の専門である Performance Management、Organizational Behavior Management (以下 OBM) についての講義を受けました。具体的には、Three-Contingency Model of Performance Management、OBM の分析ツールである Goal Directed Systems Design の Input-Output-Process Model や Goal-specification Form、Cultural Change Model についての授業が行われました。残りの授業では、さまざまテーマの問題にどのように行動分析学を応用するのにか

ついて勉強しました。そのテーマも、子育て、発達障害、統合失調症、恐怖症、薬物依存、行動医学など現在社会的に重要な問題となっていたものが多岐にわたって取り上げられていました。また、ほかにも行動分析的な視点から文化や精神分析について分析を行ったり、行動分析学の普及というトピックが取り上げられたりしていました。授業の最終日には、パワーポイントを使った発表を行いました。発表の内容は、Performance Management や、OBM の知識を用いて自分たちの日常の問題を解決するというものでした。

授業は月曜~土曜の3時から6時までの3時間行われました。授業の形式は、講義形式ではなく、セミナーの形式で行われました。その日の授業のテーマについては、主に与えられた宿題をすることによって参加者が各自で学習できるようになっていました。そうして参加者は授業の開始までに与えられた宿題をこなして、授業では宿題についてわからない部分や疑問点などを Malott 先生に質問しました。

授業では、レスポンスカードという緑色、赤色、黄色、青色の4枚のカードが参加者全員に配られており、それを使って Malott 先生の質問に全員が答えるという形で授業が行われました。他の参加者の質問や指摘に対して賛成か反対か、あるいは Malott 先生がその質問について3択や4択を作りそれに答えたりしました。レスポンスカードを使うことによって、ただ誰かの話を聞いているのではなく、常に積極的に授業参加することができました。また、毎回の授業で



は、各テーマについての original example を発表する時間が設けられており、英語に自信のない私も 1 日最低 1 回か 2 回は発表していました。授業の終わりには、その日の宿題の理解を確認するためにテストが行われました。

宿題は、約 20 ページ前後の読み物を 2 章分読んで、その中の質問に答え、さらに original example を作成してくるというものでした。宿題の量は大変多く、平日の生活は、寝ている時以外はずっと宿題をしているような状態でした。しかし、もし宿題をしていないと授業にまったく参加することができず、テストも答えられないので必死にこなしていました。その代わりに宿題さえしていれば、英語の苦手な私でも授業に参加することができ、テストでも点数をとることができるようになっていました。このような、嫌子阻止の強化と好子出現の強化の二つの随伴性により私は普段では考えられないような量の英語を読み、学習を進めることができました。

宿題の読み物は、私たちの生活に密着したものがほとんどであり、またその内容も教科書的な堅苦しいものではなく楽しく読むことができました。また、読み物の中の問題もスモールステップで設定されており、つまづくことなくどんどんこなしていけるものでした。

最終日の発表も、毎回の original example をきっちり作っておけばそれを使って作ることができました。

毎日の宿題は大変でしたが、目の前にある課

題だけをしっかりこなしていただけたので集中して取り組むことができました。最終日の発表が終わったあとはなんともいえない達成感がありました。それと同時に、Performance Management、OBM についての知識をその創始者である Malott 先生から学ぶことができ、本当に有意義な 1 ヶ月を過ごすことができました。

Richard W. Malott 先生、およびクラスメートの皆さんには私のつたない英語による質問に対しても丁寧に応対して頂き大変感謝しています。また、ウエスタンミシガン大学の竹島浩司さんには、授業外の勉強や生活のさまざまな場面で大変お世話になりました、ありがとうございます。日本から共に留学した、兵庫教育大学大学院 M1 の空間さん、岡山大学大学院 M1 のシンシンさん、岡山大学大学院 M1 のミラーさんとは授業だけでなく、週末や授業終了後にいろいろなところに行き心理学以外のアメリカも楽しむことができました。最後になりましたが、今回の機会を与えていただいた山脇短期大学の杉山尚子先生には渡米にあたりご尽力いただき大変感謝しております。

今回アメリカに行くことで、さまざま人に出会い、助けられ、多くのことを学ぶことができました。この経験をこれからの研究や生活に生かしていけるように、自らの随伴性をよりよいものに設定し、セルフマネジメントして行きたいです。

上記のような、授業場面における自然の随伴性だけでなく、大量の宿題をこなすというパフ

パフォーマンスを向上、維持するために行動分析学に基づきいくつかの仕掛けが用意されていました。

その一つがルールの明確化です。これは徹底しており、最初の授業の宿題として採点の基準やグレードのつけ方など授業に関するルールを詳細に記述したものを読むというものが用意されており、最初の授業でそれを理解しているかのテストをされました。このようにして、宿題をやること、やらないことによってもたらされる結果を明確に示すことで、私たちの宿題をするというパフォーマンスの維持、向上を助けてい

たと考えられます。

また、結果としてのフィードバックも毎日行われていました。宿題、テスト、出席が毎日採点され、次の日には私たちのもとにとどけられました。さらに、その点数から最終的なグレードの予測がなされそれも同時にフィードバックされました。

自分たちのパフォーマンスが、ルールの明確化やフィードバックによって向上、維持されることを体験することができ、そのことから今回の授業で得た知識の有益さが実感できました。

学会情報

常任理事会ヘッドライン

理事長 中野 良顯

1. 2004 年度常任理事会の開催状況

第 22 回年次大会（帝京大学）期間中の 9 月 4 日に 2004 年度の理事会が開催されました。翌 9 月 5 日には、総会が開催されました。また、第 4 回常任理事会が 10 月 24 日（日）に上智大学で開催されました。今後は、第 5 回常任理事会が 12 月 19 日（日）、第 6 回常任理事会が 3 月 6 日（日）に開催される予定です。

2. 会員数

10 月 24 日現在の会員数は、675 名（一般 517 名、夫婦 8 名、学生 148 名、購読会員 2 名）です。

3. 2004 年度会費納入のご案内

2004 年度の会費納入率は 10 月 24 日現在、76% となっております。学会の運営は、皆様の会費によって行われています。まだ今年度の会費を納入されていない方は、下記まで至急お振り込み下さるよう重ねてお願い申し上げます（一般会員 7000 円、学生会員 4000 円）。

なお、学生会員の方は、科目等履修生 / 聴講生 / 社会人学生であることを示す今年度の在学証明書 / 学生証のコピーを学会事務局宛てに郵送か FAX でお送りください。

郵便局：00120-2-352016 日本行動分析学会

4. 機関誌の発行

2004 年度発行予定の第 19 巻第 1 号は「倫理問題特集号」、第 19 巻第 2 号は、一般論文を中心にした号を予定しており、編集作業が進められております。引き続き、皆様からのご投稿を心からお待ち申し上げております。

5. 第 3 回（2005 年）日本行動分析学会学会賞について

第 3 回学会賞の選考過程がスタートしました。学会賞には「論文賞」と「実践賞」があります。まずは、会員の皆様から「実践賞」選考対象を推薦していただきます。選考対象となるのは、「現代社会における課題を解決するために行動分析学を応用として顕著な実績をあげた個人ま

たは組織」です。これは学会員であることを問いません。「実践賞」にふさわしい人や機関をぜひご推薦ください。詳しくは、本ニュースレター内の記事をご覧ください。また、12月19日に開催される予定の常任理事会において選考委員（論文賞担当17名、実践賞担当15名）を会員の皆様の中から抽選して決定する予定です。抽選された会員の方々には、選考のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

6．学会ホームページが移転します

学会のホームページは、今年度当初より更新できない状態になっており、会員の皆様には、

ご不便をおかけいたしておりました。このたび、学会のホームページをリンククラブのレンタルサーバに移転させることになりました。アドレスは、<http://www.j-aba.jp>です。近日中に「新装オープン」する予定ですのでご注目ください。

7．住所変更・お問い合わせ

学会事務局では、新入会員のお申し込みや会員の皆様の住所・連絡先変更などのご連絡を、電子メールか FAX でお受けいたしております。メールは、yoshia-n@sophia.ac.jp、FAX は、03-3238-3658 まで、お気軽にご連絡ください。

編集後記

漸くニュースレター36号をお届けすることができました。9月の帝京大学での年次大会から気がつけば、はや3か月が経とうとしております。先の台風や中越大地震に遭遇された会員の皆様には、遅ればせながらこころよりお見舞い申し上げます。

今回のニュースレターでは、学会の近況と各種の募集などについてのお知らせを中心に記事を構成致しました。

今年も後一月となりました。いささか気が早いような気も致しますが、会員の皆様どうぞよいお年をお迎え下さい。（藤）

J - A B A ニュース編集部より

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人情報、イベントや企画の案内など、さまざまな記事を募集しています。原稿はテキストファイル形式で電子メールかフロッピー(DOS)で、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。なお、ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。掲載された記事は、日本行動分析学会ホームページでの公開を原則としていますので、ホームページ上での公開を望ま

ない事項(例えば、電子メールアドレスなど)のある場合には、あわせてニュースレター編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部心理学研究室気付
日本行動分析学会ニュースレター編集部
藤 健一
(e-mail: fuji@lt.ritsumeai.ac.jp
電話 075-466-3193)

第3回実践賞 候補者（組織）推薦書

候補者 (候補組織)	お名前 (代表者)	
	ご連絡先	電話： FAX： メール：
推薦者	お名前	ご推薦者のお名前は選考過程において公表されません。
	ご連絡先	電話： FAX： メール：

本推薦書と合わせて、下記書類をお送りください。

- ・ 2000 字以内の推薦文。
- ・ 推薦文に関連する実績リスト(論文、記事等) 推薦文に関連するその他資料。

送付先

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町 7 - 1

上智大学心理学科学習心理学研究室内 日本行動分析学会事務局

2004年 月 日

2004年度「日本在住学生会員のABA参加に対する助成事業」

申請用紙

氏名:	
所属:	
発表の種別:	口頭発表 ポスター発表 シンポジウム パネルディスカッション
発表タイトル:	
指導教授の署名:	私_____は、申請者_____が、 _____大学に所属する私の指導学生で あることを証明します。 <div style="text-align: right;">2004年 月 日</div> 氏名: _____ 印 所属 _____

学会記入欄	
受理月日	受理番号
月 日	